



Title	持続可能な社会についての一考察 : J. S. ミル『経済学原理』における「停止状態」の議論を手がかりに
Author(s)	樫本, 直樹
Citation	メタフュシカ. 2009, 40, p. 79-89
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/7137">https://doi.org/10.18910/7137</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 持続可能な社会についての一考察

—J.S.ミル『経済学原理』における「停止状態」の議論を手がかりに—

### 榎本直樹

#### はじめに

環境問題とは、理論的には非常に簡単な問題であり、人間の活動が環境の容量を超えてしまったという問題である。しかしながら、その解決のために、人間の活動をその限度内に抑えることができるかという点、それはもはや不可能であるように思われる。

われわれ、とりわけ、先進国に住むわれわれは、自身の経済活動や日常生活が多くのエネルギーと資源を消費し、多くの廃棄物排出を伴っていること、また、そうした営みが、これまで、公害をはじめとするさまざまな人的・環境的被害をもたらしてきたこと、そして今なお、自国以外の人間や環境に負荷をかけていることを知っている。にもかかわらず、われわれは現在の活動・生活を営んでおり、それらは大量生産・大量消費・大量廃棄という経済活動の枠組みにおいて営まれている。

そうした活動のもたらす自然環境の破壊と生活環境の悪化への危惧ないし反省を契機に、環境倫理学においても、人間中心主義と人間非中心主義、保全と保存、自然の価値をめぐるさまざまな議論が展開されてきている。そして、それらの議論の背景に、常に見え隠れするものとして、経済成長と環境保護との対立があった。

そして近年、この両立を目指すものとして注目されているものに「持続可能な開発<sup>1</sup>」という理念がある。ただ、国際間の取り組みをはじめ、企業の経済活動ならびに環境保護活動に至る多くの活動が、この理念をかなり意識したものとなってきてはいるものの、実際のところ、経済成長という基本路線が変更されているようには見えない。しかしながら、地球の資源や環境が有限であることを考えると、これまでのように枯渇資源に依存し、廃棄物を累積していくような体制を、これ以上続けていくことは困難である。それゆえ、従来の経済成長を基本とする社会から発

---

<sup>1</sup> この言葉は持続可能な発展と訳されることもある。本稿では、基本的に Development を「開発」と訳すが、翻訳が「発展」となっている場合、ないし、デイリーが主張するような質的改善の意味合いが強い場合には「発展」としているところもある。

想を変えて、持続可能な社会が追究されなければならない。少なくとも、経済成長に基づく現状の社会を疑ってみる必要はあるだろう。しかしながら、そのように言うためには、その「持続可能な社会」がどのような社会なのかを、まずは明らかにする必要がある。

そこで、本稿では、現状の社会に対置するものとして取りあげられる、持続可能な社会がどのような社会なのか、また、そのような社会で生活を営むとは、どのようなことを意味するのかについて<sup>2</sup>、主に、ジョン・スチュアート・ミル（以下、ミル）の「停止状態 stationary state」にかんする議論を手がかりにし、ハーマン・デイリー（以下、デイリー）の「持続可能な経済」の議論を参照しつつ考えていきたい。

## 1 持続可能な開発

この章では、いきなりミルの議論には入らず、まずは持続可能な開発、あるいは持続可能性をめぐる議論について簡単に見ておきたい。「持続可能な開発」とは、環境と開発に関する世界委員会（通称ブルントラント委員会）が1987年に、その報告書「われわれの共通の未来」で提出した概念である。報告書によれば、持続可能な開発とは「将来の世代の欲求を充たしつつ、現在の世代の欲求も満足させるような開発<sup>3</sup>」と定義され、その内容は、主として、自然の生態系の保護と将来世代の利益への配慮が含まれている。また、この考え方は経済成長と環境保全を対立関係としてのみ捉えるのではなく、環境保全の枠内でどのように発展を行っていくかを示したこと、また経済成長主義者も環境保護主義者も共に同意するスタートラインを提供したことなどで、その後の環境にかかわる学問や実践にかなりの影響を与えたといえる。ただ、その内容がきわめて一般的であり、明瞭性を欠いていたこともあり、同時に、さまざまな解釈と定義をうむことにもなった。

その持続可能性をめぐる代表的な解釈として、強い持続可能性と弱い持続可能性という二つの解釈がある。強い持続可能性とは、地球の生態系が有限である以上、再生可能な資源への転換と処理能力以上の廃棄物を出さないことが持続可能性の条件であると考えられる立場である。それに対し、弱い持続可能性とは、枯渇資源への依存や廃棄物の累積が続いたとしても、相対的に資源の使用効率が高まるならば持続可能性が保持されると考える立場である<sup>4</sup>。現在、持続可能な開発という理念のもとで行われている取り組みにおいて、主流にあるのは弱い持続可能性の立場であるといえるだろう<sup>5</sup>。その理由としては、地球の生態系および資源が有限であることが明らかであるとしても、強い立場を取るに足る科学的根拠が明らかでなく、コストがかかること<sup>6</sup>、また、

<sup>2</sup> 本稿では、持続可能な社会を考えるにあたって、環境と資源の有限性という観点しか扱っていない。しかし、持続可能な社会を考えるためには他にも、世代間・世代内の公平性、あるいは正義という観点からも考察する必要がある。本稿では、扱った人物ないし紙幅の都合で、扱うことができなかった。

<sup>3</sup> 環境と開発に関する世界委員会『地球の未来を守るために』（福武書店1987）66頁

<sup>4</sup> 加藤尚武「持続可能性とは何か」41頁（加藤尚武編『環境と倫理』有斐閣2005所収）

<sup>5</sup> そうした取り組みとして、排出権取引や環境税などがある。こうした経済的な手法が弱い持続可能性に基づいていることについては、以下のものを参照。

紀平知樹「環境の価値——持続可能な開発と外部不経済の内部化——」（関西倫理学会編『倫理学研究』第38号2008）

<sup>6</sup> 例えば、地球温暖化への国際的な取り組みを見れば顕著である。

強い立場を取ることが経済の停滞につながり、人道的な援助すら不可能になるかもしれないことなどがあげられ、全体として、開発に制約をかけることへの懸念が見受けられる。

しかしながら、強い持続可能性の立場を支持する経済学者にデイリーがいる。経済成長を前提とする発想は、限界のない空間に存在しているならうまくいくが、現実はそのではない。デイリーによれば、経済は、有限の生物圏のサブシステムであり、生物圏に支えられて存在している。にもかかわらず、そのことを無視し、経済を拡大させ、さらにはそれが度を超すならば、たちまち「不経済成長」となり、「経済成長は短期的には無意味なものとなり、長期的には維持が不可能になる」と言う<sup>7</sup>。不経済成長とは、成長をもたらす不効用が効用を上回る状態であり、生産を増加させるとき、作られる品目よりも価値のある資源と幸福を犠牲にする場合に起こる、と説明されている<sup>8</sup>。それゆえ、不経済成長に苦しめられるだけでなく、生態系が破局をむかえ、私たちの生活水準が著しく低下する前に、持続可能な経済へと頭を切り換える必要があると言うのである<sup>9</sup>。その主張と道筋はいたって単純である。つまり、「経済活動が、それを包含する生態系に「投入（インプット）」という原料の再生と「産出（アウトプット）」という廃棄物の吸収を要求する場合、その要求は——持続可能な発展の条件である——生態学的に持続可能な水準にとどめておかなければならない<sup>10</sup>」というものである。そして、持続可能な経済へむけた道筋として、次の3つの指針を示している<sup>11</sup>。

- 1 すべての資源利用率を、最終的に生態系が吸収しうる廃棄物水準まで制限する。
- 2 再生可能資源を、資源を再生する生態系の能力を超えない水準で利用する。
- 3 再生不可能な資源を、可能なかぎり、再生可能な代替資源の開発率を超えない水準で使用する。

つまり、デイリーの主張は、持続可能性は、環境がどれだけの原料を供給でき、どれだけの最終廃棄物を吸収しうるかによって決まる<sup>12</sup>、ということにある。こうした指針を採用するならば、明らかに、これまでのような経済成長は望めないだろう。しかしながら、経済が生態系の全体的なシステムの中の部分であるならば、その限界を守らざるをえない。ただ、デイリーは、「成長 Growth」と「発展 Development」を区別し、そうした持続可能な経済が、量的拡大を意味する「成長」を断念することにはなっても、質的改善を意味する「発展」をもたらすことは可能だと考えている。いや、むしろ「成長」を「発展」へシフトすることを持続可能性の主眼と考えていると言える。

<sup>7</sup> Herman E. Daly, *Economics in a Full World*, SCIENTIFIC AMERICAN, September 2005, p.100 (邦訳「環境経済学の挑戦」『日経サイエンス』2005.12、102頁)

<sup>8</sup> *ibid.* p.103/105頁

<sup>9</sup> *ibid.* p.102/102,104頁

<sup>10</sup> Herman E. Daly, *BEYOND GROWTH*, Beacon Press, 1996, p.1 (新田功 他訳『持続可能な発展の経済学』みすず書房 2005、2頁)

<sup>11</sup> Daly 2005, p.102/104頁

<sup>12</sup> *ibid.* p.103/105頁

さて、そうした持続可能な発展、すなわち成長なき発展の問題を、デイリーよりも 100 年以上前に問題にした人物にミルがいる。実際、デイリーもたびたびミルに言及しており、ミルの提示した「停止状態」の概念が、「先進」経済ないし「成熟」経済にもっともふさわしい<sup>13</sup>として評価している。では、その「停止状態」とはどのようなものなのだろうか。

## 2 ミルの「停止状態」論

ミルは 1848 年に出版された『経済学原理』第 4 編の中に「停止状態について」という短い章を設けている<sup>14</sup>。停止状態とは、経済成長の停滞した状態、つまり資本と富、および人口が増大傾向をもたず、最低の利潤率に達した経済状態で、現代的な用語を使うと「低成長」ならびに「ゼロ成長」ということになるだろう。例えば、経済成長にともない人口が増加すると、食料需要が増加する。しかし、それを生産するための土地は限られ、また生産量も限られている（収穫逡減）ため、食料価格は上昇し、また、土地の稀少化にともない地代も上昇することにもなる。また、同時に労働賃金の上昇などをともなうことにもなり、次第に、得られる利潤率は低下していくこととなる。ミルによれば、経済的進歩はそもそも無制限ではない。その終点には停止状態が存在し、富の一切の増大は単にこれの到来の延期にすぎず、前進の途上における一步一步はこれへの接近であり、それゆえ、「どのような終点へ」ということを問題にせざるを得ない<sup>15</sup>と言う。この進歩的状態の終点に停止状態が存在するという考えは、ミル独自のものというよりは、アダム・スミス（以下、スミス）以来の古典派経済学者に共通の認識であった。そして、彼らはその状態に対し嫌悪を示し、忌むべきものと考えた。例えば、スミスは三つの社会状態をあげ、次のように言っている。

労働貧民の状態、すなわち大多数の人民の状態が最も幸福で最も快適であるように思われるのは、社会が富の全量を獲得しつくしたときよりも、むしろ富のいっそうの獲得をめざして前進している進歩的状態にあるときである。労働貧民の状態は、静止の状態においてはつらく、衰退の状態においてはみじめである。実際のところ、進歩的状態こそ社会のすべてのさまざまな階級にとって楽しく健全な状態である。静止の状態は活気に乏しく、衰退的状態は憂鬱な状態である<sup>16</sup>。

それに対し、ミルは停止状態を、むしろ望ましいものとして歓迎する。なぜなら、その状態は、

---

<sup>13</sup> Daly 1996 p.3 / 4 頁

<sup>14</sup> 以下、ミルの著作からの引用はトロント大学版全集 (CW) から行う。引用に際しては、以下の略記号とページ数を示す。また、独立引用文の場合は本文中に、本文中に引用する際には、脚注にて示す。なお訳出についても、以下のものを参照したが、訳は一部変えているところもある。

PE: *Principles of Political Economy*: CW2-3 (末永茂喜訳『経済学原理』5 分冊、岩波文庫 1961)

SL: *A System of Logic*: CW8

<sup>15</sup> PE752

<sup>16</sup> Adam Smith, *An Inquiry into The Nature and Causes of The Wealth of Nations*, CHARLES E. TUTTLE COMPANY, 1979, p.81 (大河内一男訳「国富論」『世界の名著 31 アダム・スミス』中央公論社 1968、154 頁)

必ずしも人間的進歩の停止状態を意味するものではなく、現状よりも大きな改善となりうると考えるからである。ミルは停止状態を、人間的進歩の観点から、量的増加を伴わない質的改善の問題として論じているといえる。

では、ミルは停止状態が、人間的な進歩に寄与するものとして、何をもたらすと考えているのだろうか。まず、最初にあげられるのが経済的闘争の消滅という点にある。ミルは、生産の増大（経済成長）を促す産業社会の風潮に対して次のように言っている。

自らの地位を改善しようと苦闘している *struggling* 状態こそ人間の正常な状態である、また、今日の社会生活の特徴となっているものは、互いにひとを踏みつけ、おし倒し、おし退け、追いせまることであるが、これこそ最も望ましい人間の運命であって、決して産業的進歩の諸段階中の一つが備えている忌むべき特質ではない、と考える人々がいだいている、あの人生の理想には、正直に言って私は魅力を感じないものである（PE754）

これは経済活動においてよく見られる競争状態であり、それを支える考え方でもあると言えるが、ミルはこれをあまり高く評価していない。このような状態においては、人びとの関心は、自己利益や立身出世の追求といった狭い領域に集中していく。ミルはこうした競争状態について、文明の進歩の途上における必要な一段階であることは認めつつも、社会的完成に属するものではないと言う。ミルが、人間の望ましい状態として考えているのは次のような状態にある。

人間性にとって最善の状態はどのようなものかといえば、それは、だれも貧しいものはおらず、そのため何びとももっと富裕になりたいと思わず、また他の人たちの抜け駆けしようとする努力によって押し返されることを恐れる理由もない状態である（PE754）

ただ、ミルはこのように言っているが、経済成長や競争を完全に否定しているわけではないことには注意を向けておく必要はある。ミルは、経済成長について、社会発展のある場面、つまり後進国の場合などでは、成長を不可欠と考えている。また、競争状態についても、人類のエネルギーが鈍りよどむよりも、はるかによいと考えており、競争よりもむしろ闘争を問題にしているといえる。上の引用で、ミルが問題にしているのは、「生産の単なる増加に付されている過度の重要性」に対して<sup>17</sup>であり、社会の生産力信仰ともよぶべきものに対して懐疑を示しているのである。ミルは、当時のイギリス社会を、十分に進歩したものと考えており、これ以上、生産の増大と富の蓄積を増大することは、結局、その豊かさを誇示すること以外の快楽を生まない消費を促すか、多数の個人が中産階級へ成り上がることに、また有業の富裕者から無職の（働かなくてもよい）富裕者への成り上がりを促すことにしかならない、と考えている。ミルによれば、むしろ、経済的に必要なものとして、生産や蓄積の増加ではなく、よりよき分配を主張する<sup>18</sup>理由もここ

<sup>17</sup> PE758

<sup>18</sup> PE755

にあるといえる。

次に、停止状態がもたらすものとしてミルが考えているものが、適度な孤独である。ミルは孤独の必要性について、次のように言っている。

人間にとっては、必ずいつもその同類のまえに置かれているということは、よいことではない。孤独というものがまったく無くなった世界は、理想としては極めて貧しい理想である。孤独——時おりひとりであるという意味における——は、思索または人格を深めるためには絶対に必要なことであり、自然の美観壯観のまえにおける独居は、思想と気持ちの高揚……を育てる揺籃である (PE756)

このように思索や人格を深めるためにも孤独、とりわけ自然の前における孤独を重視するが、そうした孤独を妨げるものとして、ミルは人口の増加（過密化）を問題としている。確かに、技術の向上と資本の増加を仮定すれば、世界にはさらなる人口の増加を受け入れることは可能である。しかし、ミルはそれを望ましいと考える理由はほとんどないと言っている。なぜなら「人類が協業および社会的接触の両者から生ずる利益のすべてを最大限度まで獲得しうるために必要とされる人口の密度は、……すでに到達されている<sup>19</sup>」からである。また、その増えた人口を養うためには食料をはじめとするさまざまな生産のために土地が必要になり、自然を利用し、破壊していくことになる。つまり、人口の増加とそれともなう経済活動は、結局のところ、自然が自発的に活動するための余地と、ひとが思索と人格を深める余地を奪うことになってしまう。ミルによれば、経済的進歩にともなうさまざまな技術改良は、労働を節約することによって得られた時間を「人生の美点・美質を自由に探求する」ことを可能にするはずである。しかしながら、実際のところ、それによって短縮された時間は、新たな経済活動や、自己利益のための闘争に向けられる。それゆえ、上にあげたような余地を残し、本来の意味での技術改良をもたらす意味においても、資本と富の追求と人口の制限し、停止状態に自らはいることの必要性を説く。

自然の自発的活動のためにまったく余地が残されていない世界を想像することは、決して大きな満足を感じさせるものではない。……もしも地球に対しその楽しさの大部分のものを与えているもろもろの事物を、富と人口との無制限なる増加が、地球からことごとく取り除いてしまい、そのために地球がその楽しさの大部分のものを失ってしまわなければならぬとすれば、しかもその目的がただ単に地球をしてより大なる人口——しかし決してよりすぐれた、あるいはより幸福な人口ではない——を養うことを得しめることだけであるとすれば、私は後世の人たちのために切望する。彼らが、必要に強いられて停止状態にはいるはるかまえに、自ら好んで停止状態にはいることを (PE756)

---

<sup>19</sup> PE756

この章の最初でも述べたように、ミルによれば無制限の成長はありえず、おのずと終点である停止状態に至ることは不可避である。そしてその時には、自然は使い果たされていることになっているかもしれない。こうした事態を避けるためにも、自ら停止状態にはいることが必要であり、むしろそのことが人間的な進歩に、そして技術的な進歩に寄与するとミルは考えている。そうした資本と富は増大しないが、人間的な進歩は可能である状態として停止状態を描いている。

さて、ここまで、停止状態がもたらすとミルが考える「経済闘争の消滅」と「適度な孤独」という視点から、ミルの停止状態について見てきた。それらの主張の中心にあるのは、人間的な進歩あるいは成長という問題であったといえる。しかしながら、その問題とは別に、見方を変えると、資源の利用をめぐる問題と自然環境の保護という問題もそれらの主張の中には含まれているように思われる。ミルは、経済成長を支える生産力信仰とでもよぶべき、単なる生産の増大に付された過度の強調を問題にすることで、豊かさの誇示や富裕者にとつての、あまり快樂を生むことのないものを生産することだけのために、資源を消費し続けることにどれほどの意味があるのかを問うていると言える。また、ミルが適度な孤独の必要性を問題にすることから見えてくるのは、人間の成長や存在と自然環境とが密接にかかわっていることの認識である。つまり、人間になくしてはならないものとして、自然が自発的に活動する余地を残すことの意味を問うている、と言える。ミルが停止状態を問題にする際、その関心は、確かに自然環境というよりは人間に向いている。つまり、それは、経済と人間との関係を問題とし、人間が発展する社会を問題にしているということである。

しかし、停止状態において示されたのは、同時に、環境破壊のない、自然と人間の共存する社会でもあり、経済と自然環境との関係を、人間の問題としてどのように考えるのか、ということでもあったように思われる。

### 3 持続可能な社会にむけて

ここからは、これまでの議論をふまえ、持続可能な社会がいかなる社会なのか、また、そのような社会で生活を営むとは、どのようなことを意味するのかについて考えていきたい。先に取りあげた、デイリーは「今日、定常状態という古典派の亡霊が、持続可能な発展という装いをまとって、招かれもしないのに表舞台に戻ってきた<sup>20</sup>」と言っている。デイリーの持続可能な発展の議論とミルの停止状態の議論においては、デイリーの関心が社会政策的なところにあるのに対し、ミルのそれが人間的な進歩の強調にある点で、その内容が若干異なるとはいえ、質的な改善を問題としていること、つまり、量的な成長がある時点で質的な発展に道を譲る必要がある、と考えている点で共通している。

さて、前章において、われわれはミルの停止状態について見てきたが、産業革命以後の無限の自然に対する人間の支配力の増大の時代にあつて、理想的な社会像として停止状態を示したミルは、そうした議論を通して何を示そうとしたのだろうか。ミルの議論は、一見すると、人間的進

---

<sup>20</sup> Daly 1996 p.4/6 頁

歩や成長を賛美し、ある種の理想状態として停止状態を示しているだけのようにも見える。しかしながら、ミルが問題にしているのは、成長状態か停止状態かということではなく、「いつ停止状態に入るか」という問題であり、ミルはわれわれに対して、その選択を示し、その選択をせまっていると言える。というのも、ミルが言うように、停止状態はすぐそこにまできている現実であり、資本主義経済にとって、少なくとも古典派経済学にとって、資本・人口・生産がいずれ停止する状態にいたることは不可避である。その意味で停止状態は「宿命」である。しかしながら、ミルが主張するように、自ら好んで停止状態に入るといふことは、それは「必然」の問題として考えることができるということである。つまり、ミルにとって、停止状態は、「抵抗不可能な」宿命としてではなく、因果関係における単なる「継起の斉一性」として、人間の意志の介入を認める必然の問題であり、最大幸福のために経済成長を制御する選択の問題として、考えている<sup>21</sup>。

これと似た問題意識はデイリーの議論の中にも見られる。先にも言及したように、経済は、有限の生物圏のサブシステムである以上、その全体としての生態系の限界を守らざるをえないという前提に立つデイリーにとって「果てしなく成長する経済を継続していくことは、生物物理学的に不可能」であり、その上で「政治的に不可能なことに取り組むか、生物物理学的に不可能に取り組むか、どちらかを選ばなければならないとすれば、私なら後者をより不可能とみなし、前者に取り組むほうに賭ける」と言っている<sup>22</sup>。この政治的に不可能なことというのは、一般的に不可能であるとされる（決めつけられる）ことであり、デイリー自身はその発想こそを転換し、持続可能な経済へ移行する、そういう選択を、われわれに求めている。そして、その発想の転換とは、量的拡大から質的改善へとということであった。

しかしながら、こうした選択ないし転換の要求を受け入れた、つまり、デイリーの持続可能な経済への移行、ならびにミルの停止状態へと移行した社会は、多くの制限をとまなうと同時に、大きな問題を孕むように思われる。

#### 4 消費の制限と個人の自由

先に見たように、デイリーによれば、持続可能性は環境がどれだけの原料を供給でき、どれだけの最終廃棄物を吸収しうるかによって決まる。また、このままの経済成長を続けると、生産と消費のもたらす効用を不効用が上回ることもなり、結局のところ「無益性の限界<sup>23</sup>」、すなわち、まったく効用の付加されなくなる点に達する。つまり、ある限度を超えた成長は、環境容量の点からも、限界効用の通減という点からも、容認できないということになる。この限界効用通減の認識はミルにおいても見られる。つまり、単なる生産の増大は、結局のところ、富裕な人の豊かさを誇示する以外の快樂を生まない消費を促すだけであり、より幸福でない人口を増やすことにしかならない、という認識である。要するに、こうした両者の主張から引き出されるのは、持続

<sup>21</sup> ミルは『論理学体系』第6巻第2章「自由と必然」のなかで、このように「宿命」と「必然」を区別している（SL839）が、この区別、ないし停止状態が功利主義的な根拠に基づいていることを指摘するものとして、以下のものを参照。船木恵子「J.S.ミル「自然論」の思想」（研究年報『経済学』Vol.62 No.4、東北大学 2001）

<sup>22</sup> Daly 2005 p.102/104 頁

<sup>23</sup> Daly 2005 p.103/105 頁

可能な社会においては、これまでのような生産と消費の増大に基づく生活からの大きな転換が求められるということである。また、そのことから必然的に導かれるのは、そうした生活においては、多くの制約、とりわけ消費に対する制限が課されるだろう、ということである。ただ、こうした制限を課すことに対しては、すぐさま多くの反対意見に出くわすことになる。なぜなら、それらは個人の自由と衝突することになるからであり、また、反対する多くの人びとが「個人の自由が資源保全より大きな善であると信じている<sup>24)</sup>」からである。

われわれの社会は、個人の自由を最大限に尊重することを基本とする自由社会ないし自由主義社会である。しかしながら、そうした社会がこれまで自然環境の破壊と生活環境の悪化してきたことも事実である。この自由社会のもつ問題点を、キャレット・ハーディンの「共有地の悲劇」という例が明確に示している。「共有地の悲劇」とは、まず、すべての人が使用できる牧草地がある。そのとき、牧夫はおのおの、できるだけ多くの牛を放牧しようとする。人間と家畜の数が、土地の許容量以下に保たれている限りは、このようなやり方でも十分に機能する。しかし、牧夫は、合理的な人間として、自分の群れにもう一頭を加えた時にいかなる効用が生じるかを考える。この効用は、正の効用としては、増えた一頭の売却利益をまるまる得ることになり、負の効用、つまり、過度の放牧の効果はすべての牧夫によって負担され、マイナス1の数分の1となる。となると、彼がとるべき行動はもう一頭群れに加えるという結論が導かれ、そして、共有地を分けあっているすべての牧夫が同じように考え行動するならば、悲劇が生じることとなる。つまり、「各人が、限りある世界において、限りなく自らの群れを増やすよう彼を駆り立てるシステムに、閉じこめられてしまうのである。共有地についての自由を信奉する共同体において、各人が自らの最善を追求しているとき、破滅こそが全員の突き進む目的地」となる<sup>25)</sup>、というものである。ここで示されている牧草地の負担能力（放牧の可能容量）が有限であることは、地球の資源や環境が有限であることと類比的であり、個人の自由に委ねることが、自らの生存基盤を崩すことになる、ということである。

では、この自由の何が問題なのだろうか。まず一つ目の問題は、牧夫がつぎつぎと放牧していくことにかかわる、個人の自由を最優先することが、環境に対する責任を軽視するということである。そして、二つ目の問題は、この牧夫が合理的な経済人として描かれていることからわかるように、尊重される個人の自由が、現実にはもっぱら経済的自由として行使されるということにある<sup>26)</sup>。確かに、この例の中にいる、ある牧夫は、放牧をやめることができる。しかしながら、自分がやめても他の人びとが放牧を続ければ、全体への影響はかわらず、さらに、自分だけが損をしてしまうことになる。それゆえ、そうならないためにも、利益を獲得のための競争をせざるをえなくなり、その結果、共有地の崩壊をまねくことになるのである。これは、ミルが当時の経済成長を促す産業社会に見た光景でもあった。

<sup>24)</sup> シュレーダー＝フレチュット編『環境の倫理』上、晃洋書房、1993、288頁

<sup>25)</sup> シュレーダー＝フレチュット編『環境の倫理』下、晃洋書房、1993、451-452頁

<sup>26)</sup> ハーディンの「共有地の悲劇」の説明に関しては、以下のものを参照。

本田裕志「消費者の自由と責任」207-208頁（加藤尚武編『環境と倫理』有斐閣2005所収）

この自由をめぐる問題は、さまざまな制約を課せられることに対して反対する人びとのまもろうとしている個人の自由にも、さらには、自分の経済活動や日常生活が多くの資源を消費し、多くの廃棄物を排出していることを知りつつも、「自分ひとりが改めてもどうにもならない」と思いつつ、現状の生活を続けているわれわれにもそのままつながら。こうした自由は限界のない無限の空間に存在しているのならば正当化されるかもしれないが、上の例からも明らかのように、環境は有限であり、閉じている。それゆえ、われわれはその自由、すなわち経済的自由としての個人の自由を手放すか、少なくとも、大きな制約を受け入れなければならなくなるということになるのである。

### おわりに

ここまで、デイリーの持続可能な経済についての議論を対比させつつ、ミルの停止状態についての議論を手がかりにして、持続可能な社会について考えてきた。デイリーによれば、地球環境の有限性が明らかになった現在、経済が生態系の下位システムであることを無視し、これ以上の経済成長を続けることは生物物理学的にもはや不可能である。それゆえ、量的拡大から質的改善へと発想を転換し、持続可能な経済へ移行することを求めている。また、デイリーよりも100年以上前に、ミルは成長なき発展の問題を論じていたと言える。ミルによれば経済的進歩は無制限ではなく、その終点には停止状態が存在する。しかしながら、ミルは、その状態を、むしろ人間的な進歩をうながす社会として描き、自ら好んで停止状態にはいることを求めた。この両者の主張を通して浮かび上がる持続可能な社会、つまり、「成長」から「発展」へとシフトした社会は、現代のわれわれにとっては、自らの消費生活に対して、とりわけ経済的自由としての個人の自由に大きな制約を課さなければならないことも意味するために、なかなか受け入れがたいものであることは事実である。しかしながら、そうした自由を支えられた成長や進歩が、環境と資源の制約を受けることもまた事実である。

近年、持続可能な開発という理念が定着してきたことにもない、企業活動においても環境への配慮がみられるようになってきた。これまで、環境の破壊あるいはそれへの負荷は、経済にとって外部の問題であったが、それを経済の内部に取り込むこと（外部不経済の内部化すること）によって、そうした問題を解決しようとしている。確かに、こうした考えないし動きは、経済成長だけを指すのではなく、経済成長と環境保護の両立を目指しているという点で、一定の評価はできる。しかしながら、それらは、あくまでそれにかかる費用と得られる便益を比較し、費用が便益を上回らない範囲で、という条件がつく点で、そして、経済成長という基本路線が変更されているわけでもないという点で、不十分とは言えないだろうか。これまで環境を悪化させてきた経済成長が、環境を保護することが可能なかどうか、問い直してみる必要はありそうである。

いま、身の回りを見渡すと、環境に配慮した経済成長が「持続可能な社会」の形として浸透しつつある。しかしそれは、ミルの言う意味での、停止状態の先延ばしにすぎない。持続可能な社会に入るかどうかの選択肢のあるうちに、われわれは発想を大きく変える必要があると思われる。

(かしもとなおき 臨床哲学・博士後期課程)

An Examination of Sustainable Society  
—From the Discussion on “Stationary State”  
in J.S.Mill’s *Principles of Political Economy*—  
Naoki KASHIMOTO

In this article, we consider what kind of society is a sustainable society.

We can no longer continue economic growth infinitely because the environment and resource are finite. According to Daly, we cannot ignore that the economy is a subsystem of finite biosphere that supports it. Therefore we must shift our idea from quantitative expansion to qualitative improvement, thus making the transition to a sustainable economy.

Mill discussed the problem of development without growth 100 years earlier than Daly. According to Mill, economic progress is not boundless and at the end of it lies the stationary state. Mill welcomed nevertheless the state as society promoting human progress. He requests that we should be content with the stationary state.

The society conceived by Daly and Mill, that is the one, which shifted from Growth to Development, is not too desirable for us in this age, because the society will then be accompanied with a limit of consumption. The limit conflicts with our freedom. In particular, we need to impose restrictions on economic freedom.

However, if we accept the inherent biophysical limit of the ecosystem, our freedom cannot but take such limits.

〔キーワード〕

経済成長、持続可能な開発（発展）、停止状態、経済的自由、消費の制限